# 婦人薬

製品群No. 49

ワークシートNo.29

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| ビタミンB12(メコバラミン) | メチコバール錠250μg/メチコバール錠500μg | メコバラミンは、生体内補酵素型ビタミンB12の1種であり、ホモシステインからメチオニンを合成するメチオニン合成酵素の補酵素として働き、メチル基転位反応に重要な役割を[illegible]神経細胞内小器官へよく移行し、核酸・蛋白合成を促進する作軸索内輸送、軸索再生の促進する作髄鞘形成(リン脂質合成)の促進する作用<br>シナプス伝達の遅延、神経伝達物質の減少を回復する作用<br>を有する。 | | | | | 0.1～5%未満(食欲不振、悪心・嘔吐、下痢) | 0.1%未満(過敏症) | | | 水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者(長期大量) | | | | | 水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたる大量投与は避けることが望ましい。本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。 | | 錠250μg<br>通常、成人は1日6錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。<br>ただし、年齢及び症状により適宜増減する。<br>錠500μg<br>通常、成人は1日3錠(メコバラミンとして1日1,500μg)を3回に分けて経口投与する。<br>ただし、年齢及び症状により適宜増減する。<br>本剤投与で効果が認められない場合、月余にわたって漫然と使用すべきではない。水銀及びその化合物を取り扱う職業従事者に長期にわたって大量に投与することは避けることが望ましい。 | 末梢性神経障害 |

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| ビタミンC | アスコルビン酸「ヨシダ」 | アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・バロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間の短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。 | | | | | 頻度不明(悪心・嘔吐・下痢等) | | | | 高齢者 | | | | | 下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 | | 通常成人1日50～2,000mgを1～数回に分けて経口投与する。<br>なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。 | 1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・バロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など)<br>2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。<br>毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。<br>なお、2.の効能・効果に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 |
| ビタミンE | ユベラ錠 | 微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。<br>膜安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。<br>抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制す<br>内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。 | | | | | 0.1～5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢) | 0.1%未満(過敏症 | | | | | | | | 末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきではない。 | | 錠剤<br>通常、成人には1回1～2錠(酢酸トコフェロールとして、50～100mg)を、1日2～3回経口投与する。<br>なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 1.ビタミンE欠乏症の予防及び治療<br>2.末梢循環障害(閉塞性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症)<br>3.過酸化脂質の増加防止 |

# 婦人薬　　製品群No. 49　　ワークシートNo.29

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| その他 | アミノエチルスルホン酸 | タウリン散「大正」 | ・胆汁酸排泄促進作用を有する。<br>・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、AlP、γ-グロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロールエステル比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。<br>・心筋代謝改善作用、心筋保護作用<br>・実験的慢性心不全による死亡率低下 | | | | | 0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振) | 0.5%未満(過敏症) | | | 高齢者 | | | | | | | アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うっ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。 | 高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能うっ血性心不全 |
| | グルクロノラクトン | グロンサン散 | 循環血流量増加 | | | | | | | | | 高齢者 | | | | | | | 1回0.3～1g、1日3回、適宜増減。高齢者では用量に注意 | 高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善、蕁麻疹、湿疹、中毒疹、妊娠悪阻、妊娠中毒 |

# 避妊薬

製品群No. 50

ワークシートNo.30

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| メンフェゴール | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

# その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| トリコマイシ | なし | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クロラムフェニコール | クロマイ膣錠 | グラム陽性、陰性菌に抗菌作用 | | | | | 頻度不明（長期連用：内服・注射等全身投与と同様な症状） | 頻度不明（過敏症） | | 本剤成分過敏症既往歴 | 高齢者 | | | | 必要最小限の使用。内服させない。 | 長期連用しないこと。 | | 1日1回1錠、局所に挿入 | クロラムフェニコール感性菌による細菌性膣炎 |
| エチニルエストラジオール | 外用なし、プロセキソール錠 | 前立腺、精のう重量を減少させ血中テストステロン値を低下させる | | 血糖降下薬（血糖降下作用の減少）、リトナビル（本剤の作用減少） | 頻度不明（心不全、狭心症、長期連用：血栓症） | | 頻度不明（黄疸、肝機能異常、血圧上昇、精神障害の再発、大量継続投与により高カルシウム血症・ナトリウムや体液貯留、不正出血、経血量変化、下腹部痛、乳房緊満感、乳房痛、悪心、おう吐、食欲不振、下痢、腹痛、胃痛、頭痛、めまい、倦怠感、陰萎 | 頻度不明（過敏症） | | エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い（腫瘍の悪化あるいは顕性化）、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴（血液凝固能の亢進によりこれらの増悪） | 肝障害、子宮筋腫、子宮内膜症または既往歴、心疾患・腎疾患または既往歴、てんかん、糖尿病、高齢者、 | | | | | 長期連用：血栓症、卵胞ホルモン剤を長期間（1年以上）使用した閉経期以降の婦人では子宮内膜癌を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間、使用量と危険度の上昇に相関性があることを示唆する疫学調査あり | | 1回0.5～1mg、1日3回。適宜増減。高齢者減量 | 前立腺癌、閉経後の末期乳癌（男性ホルモン療法に抵抗を示す場合） |

# その他の女性用薬

製品群No. 51

ワークシートNo.31

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| エストラジオール | 貼付剤あり、エストラダームM | 卵巣機能低下または消失によるエストロゲン欠乏症による閉経症状の改善。 | | リファンピシン・抗てんかん薬・HIV逆転写酵素阻害薬・セイヨウオトギリソウ含有食品・ステロイドホルモン(本剤の代謝が促進され血中濃度が低下)、プロテアーゼ阻害薬(本剤の血中濃度が変化) | 頻度不明(静脈血栓塞栓症、血栓性静脈炎)、乳癌・冠動脈性心疾患・脳卒中・痴呆などの発生との関連性を示唆する報告あり。 | 頻度不明(アナフィラキシー様症状) | 頻度不明(片頭痛、静脈瘤の悪化、胆石症、胆のう疾患、胆汁うっ滞黄疸、下肢痛、ポルフィリン症の悪化、喘息の悪化、耳硬化症)、5%以上(一次刺激性の接触性皮膚炎、不正出血、消退出血、帯下、乳房緊満感)、0.1~5%未満(かぶれ、水疱、色素沈着、外陰部腟脹感、外陰部掻痒感、子宮内膜増殖、乳房痛、乳頭痛、乳腺症、頭痛、眠気、めまい、動悸、おう吐、吐気、下痢、腹部膨満感、便秘、心窩部痛、浮腫、肝機能障害、腹痛、下腹部痛、関節痛、腰痛、耳鳴、体重増加・減少、倦怠感、トリグリセライド上昇、フィブリノーゲン増加)、0.1%未満(不眠、胸部不快感、血圧上昇、発熱) | 頻度不明(過敏症) | | エストロゲン依存性腫瘍およびその疑い(腫瘍の悪化あるいは顕性化)、血栓性静脈炎・肺塞栓症または既往歴(血液凝固能の亢進によりこれらの増悪)、本剤成分過敏症既往歴、妊婦または妊娠の可能性および授乳婦、動脈性の血栓塞栓症 | 子宮筋腫、子宮内膜症、乳癌家族素因が強いまたは乳房結節、乳腺症、乳房レントゲンに異常、高血圧・心疾患・腎疾患または既往歴、糖尿病、片頭痛、てんかん、肝障害、術前または長期臥床状態、全身性エリテマトーデス、高齢者 | | | | | 大量投与:ナトリウムや体液の貯留 | 長期連用:血栓症、卵胞ホルモン剤と黄体ホルモンを長期間使用した女性では乳癌を発生する危険度が対照群に比べ高く、使用期間と危険度の上昇に相関性があるとの報告あり | | 1回1枚(0.72mg)貼付。2日ごとはりかえ | 更年期障害および卵巣欠落症状に伴う:血管運動神経症状、泌尿生殖器の萎縮症状、閉経後骨粗鬆症 |

# 抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 抗ヒスタミン成分 | 塩酸ジフェンヒドラミン | ベナ錠 | 抗ヒスタミン作用:H1受容体に対しヒスタミンと競合的に拮抗することにより作用をあらわす。ヒスタミン遊離抑制作用: | | アルコール・中枢神経抑制剤・MAO阻害剤(中枢神経抑制作用が増強)、抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用が増強) | | | 頻度不明(口渇、悪心・嘔吐、下痢、めまい、倦怠感、神経過敏、頭痛、眠気、動悸)自動車の運転等危険を伴う機械の操作 | 頻度不明(過敏症) | | 緑内障(悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(悪化) | 授乳中の婦人、未熟児、新生児、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者 | | | | | | | 塩酸ジフェンヒドラミンとして、通常成人1回30～50mg(3～5錠)を1日2～3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 蕁麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹、皮膚炎)、枯草熱、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、急性鼻炎、春季カタルに伴うそう痒 |
| | d-マレイン酸クロルフェニラミン | ポララミン錠2mg | 抗ヒスタミン作用 | | 中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇) | 痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明) | ショック(頻度不明) | 5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機械の操作 | 5%以上又は頻度不明(過敏症) | | 本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ) | 眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人 | | | | | | | d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1～4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。 |

# 抗ヒスタミン薬主薬製剤

製品群No. 52

ワークシートNo.32

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 抗ヒスタミン成分 | メキタジン | ゼスラン錠 | ケミカルメディエーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用 | | 中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メトキサレン(光線過敏症) | 肝機能障害・黄疸・血小板減少(頻度不明) | ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明) | 0.1～5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視調節障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感)、頻度不明(黄疸)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作。 | 0.1%未満(過敏症) | | 本剤の成分、フェノチアジン系化合物及びその類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障を悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難等) | 腎障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児 | | | | 過量投与で眠気、悪心、嘔吐、軽度の抗コリン作用性障害 | 他のフェノチアジン系化合物:長期投与又は大量投与により角膜・水晶体の混濁、網膜・角膜の色素沈着 | | 1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年令、症状に応じて適宜増減する。<br>2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年令、症状に応じて適宜増減する。 | 1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症) |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 抗炎症成分 | グリチルリチン酸モノアンモニウム | グリチロン注一号 | 抗炎症作用 | | ループ利尿剤・チアジド系および その類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症) | 偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤) | | | | | 偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化) | 高齢者、妊婦小児等 | | | | | 長期適用により偽アルドステロン症 | | グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 薬疹 |
| ビタミン成分 | ビタミンB1(塩酸チアミン) | 塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」/塩酸チアミン散1%「ホエイ」 | ビタミンB1はATP存在下にthiamine diphosphateに変換し、生理作用を現す。ピルビン酸の脱炭酸反応やTCAサイクル内のαケトグルタル酸の脱炭酸反応に関与。トランスケトラーゼの補酵素として五炭糖リン酸回路での糖代謝や核酸代謝にも関与 | | | | | | 頻度不明(過敏症) | | | | | | | | ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される疾患(神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害)では、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 | | 通常、成人には塩酸チアミンとして、1回1～10mgを1日1～3回経口投与する。<br>塩酸チアミン散0.1%「ホエイ」:1回1～10g、1日1～3回経口投与<br>塩酸チアミン散1%「ホエイ」:1回0.1～1g、1日1～3回経口投与<br>なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 1. ビタミンB1欠乏症の予防及び治療<br>2. ビタミンB1の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時等)<br>3. ウェルニッケ脳炎<br>4. 脚気衝心<br>5. 下記疾患のうち、ビタミンB1の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合神経痛、筋肉痛・関節痛、末梢神経炎・末梢神経麻痺、心筋代謝障害〔5. の適応に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。〕 |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用薬忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| ビタミンB2 | ハイボン錠20mg | コレステロール上昇抑制作用<br>家兎に酪酸リボフラビンを投与すると,ラノリン一綿実油投与による血清コレステロール値の上昇を抑制した. | | | | | 0.1～5%未満(下痢,悪心・嘔吐,胃膨満,腹部膨満)、0.1%未満(胃不快感,食欲不振) | | | | | | 尿を黄変させる(臨床検査値に影響) | | | 高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して,効果がないのに月余にわたって漫然と使用しないこと. | | 酪酸リボフラビンとして,通常,成人1日5～20mgを2～3回に分割経口投与する.<br>高コレステロール血症には,通常,成人1日60～120mgを2～3回に分割経口投与する.<br>なお,年齢,症状により適宜増減する. | | ・高コレステロール血症<br>・ビタミンB2欠乏症の予防及び治療.<br>・下記疾患のうち,ビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合.口角炎,口唇炎,舌炎,脂漏性湿疹,結膜炎,びまん性表層角膜炎<br>・ビタミンB2の需要が増大し,食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患,妊産婦,授乳婦,はげしい肉体労働時等)<br>.高コレステロール血症及びビタミンB2の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合の適応に対して,効果がないのに月余にわたって漫然と使用しないこと. |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| | ビタミンB6(塩酸ピリドキシン) | アデロキシン錠 | 体内でリン酸ピリドキサールとなり、細胞・ミトコンドリア内におけるB6酵素群の補酵素として生体のたん白質・アミノ酸代謝の中心的役割を果たす。γ-アミノ酪酸の生成や各種のアミン類(アドレナリン、ノルアドレナリン、5-ヒドロキシトリプタミン等)の生成に不可欠である。脂質代謝との関係も認められている。 | | レボドパ(レボドパの作用を減弱) | | | 頻度不明(長期・大量投与:手足のしびれ、知覚異常等) | 頻度不明(光線過敏症) | | | 高齢者、妊婦、産婦、授乳婦等、新生児、乳幼児、小児等 | | | | 長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常 | ビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される疾患(口角炎、口唇炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害)では、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。<br>長期・大量投与で手足のしびれ、知覚異常 | | 塩酸ピリドキシンとして、通常成人1日10～100mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。きわめてまれであるが、依存症の場合には、より大量を用いる必要のある場合もある。依存症に大量を用いる必要のある場合は観察を十分に行いながら投与すること。特に新生児、乳幼児への投与は少量から徐々に増量し、症状に適合した投与量に到達させること。高齢者では減量。 | ビタミンB6欠乏症の予防及び治療(薬物投与によるものを含む。例えばイソニアジド、サイクロセリン、ペニシラミン)<br>ビタミンB6の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦など)<br>ビタミンB6依存症(ビタミンB6反応性貧血、ビタミンB6依存性痙攣、アミノ酸代謝異常など)<br>下記疾患のうちビタミンB6の欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合<br>口角炎、口唇炎、舌炎、急・慢性湿疹、脂漏性湿疹、接触皮膚炎、末梢神経炎、放射線障害(宿酔) |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

| リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| ニコチン酸アミド | ニコチン酸アミド散ゾンネ | ニコチン酸アミドはニコチン酸とともにNAD、NADPに組み込まれ、脱水素酵素の補酵素として広く生体内の酸化還元反応にあずかる。 | | | | | | | | | 高齢者、妊婦、産婦、授乳婦、小児 | | | | | 2.の適応(効能又は効果)に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 | | 1・2.ニコチン酸アミドとして通常成人1日25～200mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 口角炎、口内炎、舌炎、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、光線過敏性皮膚炎、メニエル症候群、末梢循環障害(レイノー病、四肢冷感、凍瘡、凍傷)、耳鳴、難聴 |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53

ワークシートNo.33

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| | パントテン酸カルシウム | パンカル散 | パントテン酸はCoAの構成成分であり、CoAは生体内でアセチル化をはじめ、ステロイド、脂肪酸、ポルフィリン等種々の生体必須物質の合成に関与するとともに、脂肪、蛋白質、炭水化物の代謝にも関与している。 | | | | | 0.1%未満(消化器) | | | | | | | | 大量投与により腹痛、下痢 | 2.の適応(効能又は効果)に対して、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 | | パントテン酸カルシウムとして1日10～200mg(0.1～2.0g)を1～3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。 | 1.パントテン酸欠乏症の予防および治療、パントテン酸の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、甲状腺機能亢進症、妊産婦、授乳婦など)2.下記疾患のうち、パントテン酸の欠乏または代謝障害が関与すると推定される場合。ストレプトマイシンおよびカナマイシンによる副作用の予防および治療、接触皮膚炎、急・慢性湿疹、弛緩性便秘。なお、効果がないのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。 |
| 気管支拡張成分 | dl－塩酸メチルエフェドリン | dl－塩酸メチルエフェドリン散 | アドレナリン作動性の気管支拡張作用と中枢性鎮咳作用を示す。 | カテコールアミン製剤(不整脈、場合によっては心停止を起こす) | MAO阻害剤・甲状腺製剤(作用が増強)、キサンチン誘導体・ステロイド剤・利尿剤(血清カリウム値が低下) | β2刺激剤により重篤な血清カリウム値の低下 | | 頻度不明(熱感)、0.1～5%未満(心悸亢進、顔面蒼白等、頭痛、不眠、めまい、眠気、神経過敏、疲労等、悪心、食欲不振、腹部膨満感等、口渇) | 頻度不明(過敏症)、 | | カテコールアミン製剤を投与中(不整脈、場合によっては心停止を起こすおそれ) | 甲状腺機能亢進症、高血圧症、心疾患、糖尿病、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等、重症喘息(血清カリウム低下) | | | | 過度に使用を続けた場合、不整脈、場合によっては心停止を起こすおそれがある | | | dl-塩酸メチルエフェドリンとして、通常成人1回25～50mgを1日3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。一般に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。 | 下記疾患に伴う咳嗽気管支喘息、感冒、急性気管支炎、慢性気管支炎、肺結核、上気道炎(咽喉頭炎、鼻カタル)蕁麻疹、湿疹 |

# その他のアレルギー用薬

製品群No. 53　ワークシートNo.33

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| アミノ酸類成分 | アミノ酸エチルスルホン酸(タウリン) | タウリン散「大正」 | ・胆汁酸排泄促進作用を有する。<br>・実験的肝障害に及ぼす影響を有し、AlP、γ-グロブリン、BSP、血清コレステロール/血清コレステロールエステル比を改善させた。また、肝細胞の再生を促進して組織像を改善させた。さらに慢性障害群においては間質の結合織増殖を抑制した。胆汁分泌などの肝細胞機能維持に働いた。<br>・心筋代謝改善作用、心筋保護作用<br>・実験的慢性心不全による死亡率低下 | | | | | 0.5%未満(嘔気、下痢、腹部不快感、便秘、食欲不振) | 0.5%未満(過敏症) | | | 高齢者 | | | | | | | | アミノエチルスルホン酸として、成人1回1gを1日3回食後に経口投与する。なお、うっ血性心不全に用いる場合、本剤は強心利尿剤で十分な効果が認められないときに、それと併用すること。高齢者で減量。 | 高ビリルビン血症(閉塞性黄疸を除く)における肝機能の改善<br>うっ血性心不全 |
| 整腸成分 | 乾燥酵母 | 乾燥酵母「ホエイ」 | 乾燥酵母は含有する酵成分が総合して栄養補給,代謝機能促進,食欲増進,整腸などの薬効を現す。 | | | | | 頻度不明(大量投与による下痢) | | | | | | | | 大量で下痢 | | | 乾燥酵母として,通常成人1日5～10gを3回に分割経口投与する。<br>なお,年齢,症状により適宜増減する。 | ビタミンB群,たん白質の需要が増大し,食事からの摂取が不十分な際の補給 |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　　ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 薬用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌消毒成分 | アクリノール | アクリノール液 | グラム陽性、陰性菌に有効で、特に連鎖球菌、ウェルシュ菌、ブドウ球菌、淋菌に対し、静菌及び殺菌作用がある。作用機序は、生体でアクリジニウムイオンとなり細胞の呼吸酵素を阻害するといわれている。 | | | | | 頻度不明（塗布部の疼痛、発赤、腫脹等潰瘍、壊死） | 頻度不明（過敏症） | | | | | | | | ・大量服用時には、悪心、嘔吐、腹痛、下痢、肝機能障害 ・外用にのみ使用し、内服しないこと | | | | 0.05～0.2w/v%の液として使用する。 | 化膿局所の消毒、泌尿器・産婦人科術中術後、化膿性疾患（せつ、よう、扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎） |
| 殺菌消毒成分 | エタノール | 消毒用エタノール<ヤクハン>、OTCとして使用されているのは「消毒用エタノール」と同じ濃度 | 本剤は、使用濃度において栄養型細菌（グラム陽性菌、グラム陰性菌）、酵母菌、ウイルス等には有効であるが、芽胞（炭疽菌、破傷風菌等）及び一部のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。エタノールの殺菌力上の最適濃度については、その試験方法により一定しないが、通常70%と称してよく、この濃度においては皮膚に対して拡散及び揮発性も適度で、表皮を損傷することもなく、無害である。 | | | | | 頻度不明（刺激症状） | 頻度不明（過敏症） | | 損傷皮膚及び粘膜（刺激） | | | | | | ・経口投与しないこと ・過量投与：全身の倦怠、味覚・嗅覚機能の低下、顔面紅潮、発汗、悪心、嘔吐、急性胃炎、マロリー－ワイス症候群、口渇、利尿、痛覚閾値の上昇、呼吸促迫、心悸亢進、血圧下降、多幸感、酩酊、身体失調、歩行困難、急性アルコール性ミオパチー、記憶障害、感情不安定、代謝性アシドーシス、低血糖、体温低下、脱水、失禁、肝機能障害、呼吸抑制、昏睡（エタノールの血中濃度が0.4～0.5%で呼吸停止が起こる）、催眠剤との同時服用や頭部外傷の合併にも注意する。 | ・同一部位に反復使用する場合には、脱脂等による皮膚荒れを起こすことがある ・広範囲又は長期間使用した場合には、蒸気の吸入に注意する | | | 本品をそのまま消毒部位に塗布する。 | 手術・皮膚の消毒 ・手術部位（手術野）の皮膚の消毒 ・医療用具の消毒 |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 薬理のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 適量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌消毒成分 | 塩化ベンザルコニウム | 0.1w/v%デアミトール水 | ・本剤は使用濃度において、栄養型細菌（グラム陽性菌、グラム陰性菌）、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は | | | | | | 頻度不明（過敏症） | | 粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと | | | | | ・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する（刺激性がある）。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用：正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。・経口投与しないこと。洗浄には使用しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。 | ・粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと（全身吸収による筋脱力を起こすおそれがある）。 | | | 効能・効果：用法・用量（塩化ベンザルコニウム濃度） ①手指・皮膚の消毒：通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とした後、塩化ベンザルコニウム0.05～0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする。 ②手術 ⑧結膜嚢の洗浄・消毒 塩化ベンザルコニウム0.01～0.05%溶液を用いる。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用：正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい | |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌消毒成分 | 塩化ベンゼトニウム | ハイアミン液：塩化ベンゼトニウム10w/v% | 芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない | | | | | | 頻度不明（過敏症） | | | | | | | ・原液は皮膚・粘膜に付着及び吸に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位（粘膜、陰股部等）への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしようする場合の希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用 | 全身吸収による筋脱力をおこすおそれがあるので、粘膜、創傷面又は炎症部位に長期間又は広範囲に使用しない。 | | ①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落した後、塩化ベンゼトニウム0.05～0.1%溶液（本剤の100～200倍希釈液）に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする ②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液（本剤の50倍希釈液）を塗布する ③塩化ベンゼトニウム0.01～0.025%溶液（本剤の400～1,000倍希釈液）を用いる ④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液（本剤の1,000倍希釈液）を用いる ⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液（本剤の400倍希釈液）を用いる ⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液（本剤の500倍希釈液）を用いる ⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液（本剤の100倍希釈液）中で15分間煮沸する ⑧塩化ベンゼトニウム0.05～0.2%溶液（本剤の50～200倍希釈液）を布片で塗布・清拭するか、また | ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位（手術野）の皮膚の消毒 ③手術部位（手術野）の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒 ④感染皮膚面の消毒 ⑤膣洗浄 ⑥結膜のうの洗浄・消毒 ⑦医療用具の消毒 ⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒 |
| 殺菌消毒成分 | オキシドール | オキシドール | 殺菌消毒作用：使用濃度において栄養型細菌に対して殺菌作用を示すが、その作用は緩和で持続性がない。発泡による機械的清浄化作用がある。 | | | 空気塞栓 | | 適用：口腔粘膜刺激 | | | 瘻孔，膿創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位 | | | | | 易刺激性の部位に使用する場合には，正常の部位に使用する場合よりも低濃度とする。深い創傷に使用する場合の希釈液としては注射用水か滅菌精製水を用い，水道水や精製水を用いない。外用にのみ使用し、内服しないこと | 長期間又は広範囲に使用しないこと | | ①原液のままあるいは2～3倍希釈して塗布・洗浄する。②原液のまま塗布，滴下あるいは2～10倍（耳科の場合，時にグリセリン，アルコールで希釈する）希釈して洗浄，噴霧，含嗽に用いる。③原液又は2倍希釈して洗浄・拭掃する。④10倍希釈して洗口する。 | ①創傷・潰瘍の殺菌・消毒 ②外耳・中耳の炎症，鼻炎，咽喉頭炎，扁桃炎等の粘膜の炎症 ③口腔粘膜の消毒，齲窩（うか）及び根管の清掃・消毒，歯の清浄 ④口内炎の洗口 |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌成分 | クレゾール | クレゾール石ケン液「ヤクハン」：クレゾール石けん液を使用した | 薬理作用や毒性はクレゾールとほぼ同様で、その殺菌力は使用した原料によって多少異なる。本剤は使用濃度において抗酸菌を含む通常の細菌には有効であるが、芽胞および大部分のウイルスに対する殺菌効果はほとんど期待できない。 | | | | | | 頻度不明（過敏症） | | 損傷皮膚 | | | | | ・過量投与（18mL未満服用時）悪心、嘔吐、下痢、口腔・食道・胃粘膜の腐食に伴う灼熱感と疼痛、粘膜白色変性、咽頭・喉頭浮腫、上気道の狭窄、頭痛、めまい、（18mL以上服用時）吐血、食道潰瘍、下血、痙攣、筋線維性攣縮、腱反射消失、せん妄、興奮、不穏、瞳孔縮小、体温低下、代謝性アシドーシス、メトヘモグロビン血症、貧血、溶血、血圧低下、チアノーゼ、心筋炎、不整脈、ショック、呼吸麻痺、肺水腫、昏睡、心停止、肝障害、腎障害（急性尿細管壊死による）。・皮膚に付着した場合、白色または茶褐色の化学熱傷を認める。　・経口投与しないこと・喉に入らないようにすること・希釈する水にアルカリ土金属塩、重金属塩、第二鉄塩、酸類が存在する場合、変化することがある。常水で希釈すると次第に混濁して沈殿を生ずることがあるが、このような場合は上澄み液を使用。 | 長期間又は広範囲に使用しないこと | | | ①クレゾールとして0.5～1%（クレゾール石ケン液として1～2%）②クレゾールとして1.5%（クレゾール石ケン液として3%）③クレゾールとして0.1%（クレゾール石ケン液として0.2%）炎症又は易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用するよりも低濃度とする | ①手指・皮膚の消毒　手術部位（手術野）の皮膚の消毒医療用具の消毒　手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒　②排泄物の消毒　③膣の洗浄 |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54

ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌消毒成分 | 塩酸クロルヘキシジン | グルコン酸塩として：5%ヒビテン液 | 抗菌作用（in vitro試験）・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。・ウイルスに対する効力は確定していない。<br>作用機序：作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白 | | | | ショック(0.1%未満) | | 0.1%未満（過敏症） | | ・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳（内耳、中耳、外耳）（聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。） ・膣、膀胱、口腔等の粘膜面（ショック症状の発現が報告されている。） ・産婦人科用（膣・外陰部の消毒等）、泌尿器科用（膀胱・外性器の消毒等）には使用しない。 ・眼に使用しない | ・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴 | | | | ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。. | | | 本品は下記の濃度（グルコン酸クロルヘキシジンとして）に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量：①手指・皮膚の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）（通常時：0.1%水溶液（30秒以上） 汚染時：0.5%水溶液（30秒以上）） ②手術部位（手術野）の皮膚の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈）（0.5%エタノール溶液） ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液（本剤の100倍希釈）（0.05%水溶液） ④医療用具の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は 0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈）（通常時：0.1%水溶液（10～30分）汚染時：0.5%水溶液（30分以上） 緊急時：0.5%エタノール溶液（2分以上））⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液（本剤の100倍希釈）（0.05%水溶液） | |

# 殺菌消毒薬（特殊絆創膏を含む）

製品群No. 54　ワークシートNo.34

| | リスクの程度の評価 | | A 薬理作用 | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ） | | F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ） | | G 使用方法（誤使用のおそれ） | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 評価の視点 | | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ） | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ） | 使用方法（誤使用のおそれ） | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 |
| | | | | 併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ） | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 過量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 殺菌消毒成分 | ポビドンヨード | イソジンスクラブ（75mg/mL）液剤 | 抗殺菌作用、抗ウイルス作用を有する | | | | ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満) | 0.1%未満（接触性皮膚炎、そう痒感、灼熱感、皮膚潰瘍、血中甲状腺ホルモン値(T3、T4値等)の上昇あるいは低下などの甲状腺機能異常）、新生児に使用し、一過性の甲状腺機能低下を起こしたと | 0.1%未満（過敏症） | | | | 本剤又はヨウ素に対し過敏症の既往歴、甲状腺機能に異常、妊婦中・授乳中の婦人（長期・広範囲） | | | | 損傷・創傷皮膚及び粘膜には使用しないこと。経口投与しないこと | 妊婦中及び授乳中の婦人には、長期にわたる広範囲の使用を避けること | | 手指・皮膚の消毒：本剤の適量を用い、少量の水を加えて摩擦し、よく泡立たせたのち、流水で洗う。手術部位（手術野）の皮膚の消毒：本剤を塗布するか、または少量の水を加えて摩擦し、泡立たせたのち、滅菌ガーゼで拭う。 | 手指・皮膚の消毒、手術部位(手術野)の皮膚の消毒 |
| 殺菌消毒成分 | ] | イソジン液（100mg/mL）液剤 | 抗殺菌作用、抗ウイルス作用を有する | | | | ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満) | 0.1%未満（接触性皮膚炎、そう痒感、灼熱感、皮膚潰瘍、血中甲状腺ホルモン値(T3、T4値等)の上昇あるいは低下などの甲状腺機能異常）、本剤を新生児に使用し、一過性の甲状腺機能低下を起こしたとの報告、ポビドンヨード製剤を膣内に使用し、血中総ヨウ素値及び血中無機ヨウ素値が一過性に上昇したとの報告、本剤を妊婦の膣内に長期間使用し、新生児に一過性の甲状腺機能低下があらわれたとの報告、ポビドンヨード製剤を膣内に使用し、乳汁中の総ヨウ素値が一過性に上昇したとの報告 | 0.1%未満（過敏症） | | 本剤又はヨウ素に対し過敏症の既往歴 | | 甲状腺機能に異常、重症の熱傷、妊婦中・授乳中の婦人（長期・広範囲） | | | | 経口投与しないこと。深い創傷に使用する場合の希釈液としては、注射用水か滅菌水を用い、水道水や精製水を使用しない。石けん類は本剤の殺菌作用を弱めるので、石けん分を洗い落としてから使用すること。 | 妊婦中及び授乳中の婦人には、長期にわたる広範囲の使用を避けること。大量かつ長時間の接触によって接触皮膚炎、皮膚変色があらわれることがある | | 手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒：本剤を塗布する。 皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒、感染皮膚面の消毒：本剤を患部に塗布する。 | 手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒、感染皮膚面の消毒 |